



聖歌集改訂ニュース

アーメンがなくなる？

現行の古今聖歌集でも、古今聖歌集増補版でも、皆さんお気付きのように聖歌の最後にアーメンのついていない聖歌があります。ついていないのは何故か、ついてるのは何故か、ということはいろいろな機会によく質問されます。一つの答えは現行古今聖歌集八頁の凡例(三)に述べられていますが、これだけでは充分とは言えません。ことに「適当でないもの」という表現は内容をあいまいにしています。

この問題は、聖歌集改訂委員会でも、新しい聖歌集の改訂作業の中で初めから議論のあったことです。そして、委員会では基本的な方向として、アーメンをつけないことにし、なければならぬものだけに限定することにしました。ここで、皆さんにその理由、委員会の学んだ結果をご報告したいと思います。

聖歌はすでに初代教会においても用いられていました。これらはすべて旧約聖書の詩編を歌ったものでした。けれども、「ユダヤ教会ではなく、キリスト教的に用いた」ことを示すために、必ず「栄光の頌」つまり「父と子と聖霊に栄光」を最後につけて歌っていたのです。初代教会がいよいよユダヤ教会から本格的に脱皮してキリスト教になっていくにつれて、キリスト教独自の聖歌が生まれてきました。そして、もはやユダヤ教と区別するための栄光の頌は必要でなくなり、栄光の頌につけられていたアーメンもなくなっていきます。アーメンは栄光の頌につけたもので、聖歌につけたわけではな

かったからです。

四世紀頃から本格的なキリスト教聖歌が盛んに生まれ出しますが、これらにはアーメンは付いていません。宗教改革の時代に、衆賛歌という形式の聖歌が多数出現して、これらが現在の聖歌集の主要な聖歌群を構成していると言われています。このような衆賛歌を多数発表した改革者ルーテルの聖歌にもアーメンは付けられていません。或る学者はルーテルはアーメンについて全く用いることを考えていなかったと言っております。当時、宗教改革の時代に聖歌集の規範とも考えられたジュネーヴ詩編集には栄光の頌は載せられていません。英国でもアメリカでも、19世紀半ばまでは、アーメンを聖歌の最後に歌うことはありませんでした。アイザック・ワッツもウェスレイ兄弟もアーメンについて全く知らなかったとさえ考えられます。

ではいつの頃からか、アーメンを付けることが主流になってきたのでしょうか。それは、英国聖公会で1833年以降のオックスフォード運動が起こると、セイラムという英国独自の典礼形式から、多くのラテン聖歌を英語に翻訳することが盛んになりました。そして、そこには栄光の頌が含まれていたのです。そこで、多数の聖歌に栄光の頌を付けて歌うことが行なわれ、かつて用いられていた栄光の頌のアーメンが再び用いられるようになりました。オックスフォード運動を推進した人々は、このようなラテン聖歌に示されるような中世の慣行にこそ、

キリスト教の真髄が示されていると考えたのです。この結果、ほとんど全ての聖歌にもアーメンがつけられてしまいました。アーメンを全ての聖歌に付けて用いる最も最初で典型的な聖歌集は、英国聖公会で用いられていたヒムズ・エンシェント・アンド・モダン（古今聖歌集）だと言われています。この傾向はすぐに聖公会から他のプロテスタント諸教会にも広がりました。

しかし、1920年頃になると英国聖公会において、アーメンについての再検討が始まりアーメンを聖歌につけるのは誤りであると認めるようになりました。その結果、1950年以降には事実上もちいることを止めるようになったのです。それ以後、発表される聖歌集は、アーメンの用い方を極めて限定したものとしております。現行の古今聖歌集もこの流れに沿っているわけです。しかし、ご覧のように未だ相当多数の聖歌にアーメンが付けられ、これらを正当化する為に冒頭に引用したようなあいまいな説明を付けざるを得なかったのです。当時の改訂委員もこの辺の状況は理解されていたと思いますが、アーメンをなくすのは、実は大事業であることが分かったからです。或る牧師さんが自分の教会の礼拝で聖歌にアーメンを付けないように提案したところ、クビになってしまったと言うこともあったそうです。会衆の抵抗が極めて強いということでしょう。しかし、歴史を見ると、実はアーメンにはそれほど長い歴史はないのです。せいぜい二百年位でしょうか。聖歌集改訂委員会では、二百年くらい前の、しかも、限定された考え方の結果出てきたアーメンの使用をむしろ千数百年に渡っての慣行に戻すことを考えたのです。新しい聖歌集でも、栄光の頌を付けるべきものにはアーメンは残ります。どうでしょう。やはりアーメンは必要ですか。皆様のご意見は？

(竹内謙太郎)

チャント - 礼拝を歌う

古今聖歌集第5部には「詩頌・唱詠礼拝式曲譜」という楽譜が、古今聖歌集の後ろの方に付録のように掲載されています。これは、英語で「SERVICE MUSIC」の訳であり、「礼拝を歌う」という立場（考え方）から、詩頌やカンティクル、聖餐式中の様々な祈りの文をチャントとして歌うことを目的として聖歌集に載っています。

旧約聖書と新約聖書を見ると、詩篇やさまざまな賛美の歌が散見されます。キリスト教礼拝の歴史と伝統の中で、自然に歌うということが定着していきました。「礼拝を歌う」という立場（考え方）が成立した所以です。

チャントとは、詩篇やお祈りの文を唱えるのではなく、一定の音をつけて歌ううたのことで、聖公会ではブレンソング（グレゴリオ聖歌）とアングリカンチャントが伝統的に歌われてきました。

このうち、アングリカンチャントは、ブレンソングの歌い方から発展してハーモニーをつけて、イギリス国教会にて盛んに歌われ、今も新しいハーモニーがつけられたりして世界の聖公会で用いられているものです。

ブレンソングはグレゴリオ聖歌のことで、詩篇やカンティクル、さまざまな祈りの歌をグレゴリオ聖歌の「詩篇唱」のスタイルで歌うものと、聖餐式の曲において「天使ミサ」曲や「マリアミサ」曲のようにそのまま歌われるものとあります。

詩篇は、そもそも歌われてきたものであるし、カンティクルは聖書の中ででてくるさまざまな賛美の歌、例えば「マリアの賛歌」「シメオンの賛歌」「ザカリアの賛歌」などのように福音書にでてくる賛美の歌は大カンティクルといい、その他の聖書にでてくる賛歌を小カンティクルといい区別をしていますが、日

全国の教区からの便り

今号から全国の教区の礼拝音楽担当者、あるいは担当委員会にお願いし、教区の様子を知らせていただきます。

まずは最北の北海道と神戸から。須田さんは北海道教区信徒の心情を代表して、また神戸の秋吉さんは、改訂作業が済み、試用版としてお送りした聖歌(創刊号に添付)についての感想を書いてくださいました。

北海道教区の礼拝音楽事情

遅れ馳せながら、昨年6月に松本正俊司祭、鈴木隆太氏をお招きして、研修会を開きました。ちょっと強引かなとも思いましたが、教役者会の延長として、教役者全員と多くの信徒参加者に、直接聖歌改訂の担当者から考え方、進展の状況、問題点などの話を聞くことができ、共通の理解が出来たことを、喜び、感謝しております。

研修会が終わった後、何人かの方が「講師の言っていることはもっともだし、よくわかるんだがなァ！」というようなことを呟いていたのを思い出します。

詩の原典との違いの問題、作詞された時代と現代の感覚のずれや歴史的経緯、神学の問題、難解語、情に過ぎる歌詞や曲等々・・・もっともだし、よくわかるのです。

北海道は北の果てとはいえ、情報伝達の面ではこの2～30年ではるかに進んだと言えます。しかし、JR特急で(南)札幌・函館間3時間半、(北)札幌・稚内間8時間、(東)札幌・釧路間4時間。車ではもっとかかります。半年は雪に覆われ、高速道路もよく不通になります。例えば、月一回の夜に札幌で開かれるセシリア会(礼拝音楽研究会)には11月後半から4月前半までは札幌以外の教会からは出席できないこともままあります。ですから、東京・京都でなされている

出来事が札幌で理解されるのに遅れてしまう上に、札幌から各地の教会に伝達されるのに遅れ、また更に信徒の皆さんに伝わるのはとなるとこれは大変なことです。しかも、単にニュースとしてだけでは意味がなく、中味が正しく伝わらないといけないうのでから・・・。

厳寒の吹雪の中「しばれるナー」「気をつけてナー」と一言を全身で表現する挨拶、他人の家を訪ねると「まず、なかに入って」と挨拶ぬきに接し合うように、人間的で情的な世界に生きていますと、もっともだし、よくわかるのだけれども、やっぱり「主われを愛す」で「北の果てなる」になっちゃうんです。今の歌詞を私たちの今の生活のものとして歌いあげていっているのでしょうか。だからどうなのかということになるのですが、でも、なんでもかでも「この聖歌をなくすことは断じて許さないゾー、エイ エイ オー！」ということではないのですが、静かにかなり寂しげに、「あの歌なくなったんだネー」という気持ちは残ると思います。

少ない人数で、手弁当で、本来の自分の仕事もあるのに、何年もこの難しい聖歌改訂作業に専門の知識を駆使して携わってくださっている方々、私たち素人には神学や詩やオタマジャクシの専門的なことはわからないけど、皆様の言っていることは間違いのないと思うので、言うことは言うけれど、どうぞお進め下さいということになると思います。

奏楽者がいなくて礼拝音楽がままならない教会がかなりある中で、歌い慣れた聖歌で改訂の考え方と合い入れにくいものを望むこともしばらくはあると思います。私は経過処置として、未公認聖歌集北海道版というのも作る必要があるかなあとも考えています。

改訂委員の皆様のおはたらきの上に、主の御力がいつも注がれて無事目的が達せられますよう北海道教区聖職信徒一同お祈りしますと共に、熱いエールをお送りします。(須田明夫)

歌詞はわかりやすく歌いやすく

神戸教区の礼拝音楽委員長、角瀬司祭より古今聖歌集改訂版について、意見なり感想を何でもいから書いてほしいと依頼を受けました。締め切りが3月8日と聞いて、慌てました。まだその11曲が私のところに、届いていませんでしたので、教会で使ってみる間もなく私個人の意見と感想になりますことをお許し下さい。

168番について、メロディーは改訂版の方がリズムがあっていいと思います。ついでに終わりから2小節の2分音符2つを、付点2分音符と4分音符にしているのではないかと思います。それと歌詞の方ですが、1番が「み名を あがむ」、2番が「えさせ たまえ」3番だけが「世に ひびきぬ」と字数が2つと4つになりますので、「世々に ひびく」とすれば、メロディーと詩の頭が揃って歌いやすいのではないのでしょうか。

179番の「みたま」について、聖霊でいい気がします、「わがたま」とか「たまもの」ぐらいで、なかなかいい言葉がすぐには出てまいりません。

183番の1、これは詩の字数と音符の数が、全く違うので、非常にむづかしいです。

フレーズングがいろいろ考えられますが、詩とメロディーのことを考えると、母音があまり長く続くと、何を歌っているのかわからなくなるような気がいたします。できれば「-」は一つか二つぐらいにすれば、歌う人も聞いている人も言葉がはっきりと分かり、歌いやすいと思います。

188番の4節の歌詞「死のとげいずこにある」と「われ勝ちて余りあらん」の意味が分かりづらいと思います。

530番の歌詞「神をほめよ」が3回あるので、2節を「神をたたえ」にしたらいかがでしょうか。

以上いろいろ述べさせて頂きましたが、この作業は如何に大変かと言うことを痛感いたしました。本当にご苦労様でございます。少しでもご協力できるようにお祈りしています。改訂版のことではないのですが、古今聖歌集464番と、どの版か解りませんが、賛美歌の17番「わが喜び わが望み」の2つはメロディーが全く同じで、歌詞が全く反対の悲しみと喜びを表現しています。従って前者は少しゆっくりと、後者は自然にテンポが速くなってきます。それで気持ちが落ちつく感じです。ちなみに17番の曲は47年前の結婚式に歌った私の心に残るメロディーと詩でした。6番までありますが1番の詩を記しますので、464番と比べてみてください。

わがよろこび わがのぞみ
我が命の君 昼にたたえ
夜 うたいて なお
足らぬを 思う

横道にそれてしまいましたが、歌詞が如何に大切かを思い知らされた次第です。現代の若い人々、新しく教会に導かれる人々に、理解しにくい歌詞は、平易で歌いやすい歌詞にすることが望まれます。どうしても、文語とか古い言葉になる場合は、下の方に注釈を記入すればよいと考えます。

172番と183番の1にフレーズマークがないのは、何故でしょうか。フレーズマークのかわりにフェルマータをつければ落ちつくと思えますが。

テンポについては教会によっても、オーガニストによっても、かなり捉え方に問題があり困惑いたします。だいたいの目安があればありがたいのですが、よろしく願いいたします。和声もできるだけ弾きやすくお願いいたします。

(岡山聖オーガストン教会 秋吉光恵)

2・3月の全体委員会から

《増補版聖歌の評価について》

前号でもお知らせしたように、委員会では「増補版は基本的に現行聖歌集の一部である」という認識から、増補版第2部の聖歌50曲を現行古今聖歌集と同様の五段階で評価する作業に入っています。「礼拝の現場で実際にどのように用いられているか」という情報も判断の重要な拠り所としつつ、現在約半数の27曲の検討を終了したところです。この結果は作業が終了後発表いたしますが、「改訂」という見地から、詩や曲になんらかの手を加えて改訂聖歌集に収録する、という作業がここでも起こってくると見えています。また増補版の聖歌には、日本基督教団の『改訂讃美歌試用版』からそのまま拝借したのもも少なくないのですが、これらが『讃美歌21』へと移行する段階でどのように変更されたか、という点にも注意を払いつつ作業を進めています。

《チャントの評価について》

一方、新しい礼拝式文用曲譜、とりわけ増補版には収録されていない朝夕の礼拝などのチャントをチャント小委員会が中心となって整備していますが、この部門についても「現行の改訂」という視点をより明確にするため、全体委員会で古今聖歌集第五部と増補版第1部の検討を行うことになりました。これは現在進行中の増補版の聖歌50曲の評価が終了次第着手する予定ですが、現行古今聖歌集第五部が礼拝の現場でどのように用いられてきたのか、という振り返りもその重要な論点の一つとなります。

一例として、特に祈祷書改正の頃から「日本人の手によるオリジナルなチャントを！」という声が多く聞かれますが、実は古今聖歌集第五部、36ページにある『聖なるかな』の曲譜(32番)は当時の教会音楽委員、山本秀治

司祭の作と記されており、すでに古今聖歌集に「日本人作曲のチャント」が存在していることを伝えています。しかし、一体どれだけの方がこの曲譜の存在を知り、聖餐式で歌ってきたでしょうか。

こうした意味でもわたしたち委員会では、この改訂作業を「編集し、出版して終わり」というのではなく「共に考え論じながら進め、発刊後の展開に充分対応する」べきであると考えています。また、チャントの使用に際して「一人の作曲者が書いたセットで統一すべきかどうか」といった問題も話し合わせ、委員会としての結論を模索することになると思います。

《聖歌公募の状況と今後の予定について》

今回の第一次公募は2月末をもって締め切らせていただきましたが、100点程度の応募があり、その中で曲がついているものは15点ほど、後は詩のみの応募、と聞いています。これからいよいよそれらを拝見させていただくことになるわけですが、聖歌の公募にあたって改訂委員会では、【匿名審査】ということを重視しています。作者の年齢性別、職業等一切の予断を排して「内容の如何によってのみ」その採用非採用の決定をしたいと考えています。

なお公募は今後も、そして来年に予定されている『改訂聖歌集試用版(仮称)』の発刊後も、本格版出版に向けて継続して行っていく予定です。今回の公募テーマは【降臨節・降誕節】【愛】でしたが、今後期間を区切りながら、【収穫感謝】【聖婚】【洗礼・堅信】【三位一体】【感謝】【大斎・聖週・復活】【朝・夕の礼拝】といったテーマでの公募を行いたいと考えて、計画しています。

公募とは別に委員会では、様々な礼拝の現場で作られ、歌われている新しい聖歌をできる限り数多く収集して検討対象にしたい、と考えています。これについては別枠のお知らせをご覧ください。(鈴木隆太)

今号の添付聖歌について

『生きている主イエス』

H82の182番。「チャールス・ウェズレー以後最も優れた英語賛美歌作家」とも評されるブライアン・レンの書いたイースターの聖歌です。曲は古今294と同じですが、294の詩が、曲が となったため、うまくこの詩を当てはめることができました。

細かくご紹介するスペースがないのが大変残念ですが、作者のブライアン・レンは1936年英国生まれ、オクスフォード大学卒業後当時の英国ウェールズ会衆派、後の英国合同改革派の牧師となりました。その後アメリカに移住、新しい感性で多くの作品を世に送っている、いわゆる「ヒム・エクスプロージョン」を代表する賛美歌作家の一人です。(関心のある方は、今年日本基督教団出版局から発刊された『新しい賛美歌作家たち』を読まれることをお勧めいたします。著者の横坂康彦氏は『讚美歌21』の編纂にも讚美歌委員・讚美歌改訂委員として深く関わった方ですが、実はアメリカ留学中にH82編纂の実務にも関わっておられました。)

『エジプトのがれ』

H82の187番。内容は出エジプト記です。曲は古今109で一旦 とされましたが、より原典に近いと思われるこちらの形ならば、と考えて採用しました。なお曲名はここではH82に従ってSTRAF MICH NICHTとしました。

『暗い冬は過ぎ』

『讚美詩』の248番。「SOUND THE BAMBOO」にも含まれており(71番)、こちらでは四声体ではなくメロディーと対旋律だけの編曲が施されています。入手可能な方は伴奏や前奏などのヒントとしてこちらを参考にされるのもいいアイデアです。聖歌隊用のレパートリーとしても好適だと思います。

『古今聖歌集 187』

基本的に現行の187を生かしながら、より原詩の内容に忠実に訳し直しました。5節では新共同訳の

言葉に合わせて「貧しき」という表現を残しました。

『古今聖歌集 189』

これも、原詩により近づける方向で手直しをしました。曲は「タリス・カノン」と呼ばれ、ソプラノ声部とテノール声部が1小節間隔でカノンの形式になっていますが、従来その美しさが生かされにくかったため、カノン声部をディスカントのように表記してみました。自由な発想で使ってみてください。なお、この曲に「アーメン」が付いているのは、最終節がドクソロジー/グロリア・パトリである、という理由によるものです。

『古今聖歌集 196』

現行の3節が若干難解であるため、原詩に戻って訳し直しました。ただ、そのために文字数/ミーターの整合性を崩すことになりました。詩が楽譜に書き込んであるので歌いにくいことはないと思いますが、皆様のご意見はいかがでしょうか。また、曲はより柔らかなニュアンスを出しつつ歌いやすくするため変口長調に変更すると同時に、オルガンで弾きやすいように手を入れました。

(鈴木隆太)

資料提供のお願い!

委員会では、新しい聖歌をできる限り数多く収集して検討対象にしたいと考えていますが、新しい聖歌がどこでどんなふう生まれ使われているか、委員会がすべてを把握することはできません。皆さんの身の回りで作られ、歌われている新しい聖歌があったら、是非教えていただきたいのです。創作でなく翻訳聖歌でも歓迎します。

なるべく郵送で、聖歌集改訂委員会までお寄せください。聖歌が生まれた背景など様々なエピソードや、録音テープなども添えていただければ大変助かります。どうぞよろしく。

【聖歌集探訪】

聖歌集改訂委員会では、新しい聖歌の公募などによってわたしたちの時代の、次世代に伝えたい「オリジナルな」聖歌をできるだけたくさん取り入れようとする一方で、国内外の多くの聖歌集／賛美歌集を調査し、改訂聖歌集に収録すべき詩・曲を探しています。

委員個人の所有する様々な新旧の資料はもちろん大きな参考になっていますが、それらの中で特に現在・将来の日本聖公会と関係が深い、と考えるものを「基礎資料」と位置付けていることは前号でも触れました。今号から本紙上でこれらの資料についてご紹介していきたいと思えます。

《The Hymnal 1982 (アメリカ聖公会)》

アメリカ聖公会の旧聖歌集“The Hymnal 1940”(実際の発刊は1943年)は、その注解書“The Hymnal 1940 Companion”と共に永年、賛美歌学の基本書／教科書として、教派を越えて信頼されてきた重要な歌集でした。これは、英国国教会から祈禱書による礼拝生活を受け継いだアメリカ聖公会が「祈禱書による礼拝生活のための聖歌集」という編集方針をとった結果としての、ある種の客観性によるところが大きかったと言っていいでしょう。

その後1979年にアメリカ聖公会の祈禱書は改正され、これと同時進行の形で編纂されたのが現行聖歌集“The Hymnal 1982”(以下H82と略記)です(1982年総会認可、1985年発刊)。

会衆用は基本的にメロディーと詩が収録されて一冊にまとまっていますが、奏楽者用のリング綴じの本は第1巻“Service Music”(礼拝式文用曲譜、いわゆるチャント)と第2巻“Hymns”(聖歌)の二分冊となっています。チャントの部は補遺を含めて448番まで、聖歌の部は720番までありますが、聖歌は第1譜・第2譜を別番号で管理する方式を取っているため、古今聖歌集のように勘定するならば聖歌は609編が収録されている、ということになります。

更にこの歌集には、“The Hymnal 1982 Companion”という注解書があります。これがものすごい本で、700ページ以上にわたる分厚い本がなんと4冊で1セットの膨大な資料なのですが、こちらも当委員会の重要な資料です。

H82は発刊以来10数年を経過しましたが、旧版と同様、教派を越えて重要視されています。『讚美歌21』もこの歌集からは大きな影響を受け、ここから幾つかの聖歌が訳されて収録されてもいます。なお、すでに数冊の増補版が世に出ていることも付言しておきます。

《讚美詩 - 新編 - 1983(中国基督教協会)》

1966年、中国に文化大革命が起こると、それまで活動が認められていたキリスト教諸派は非合法の扱いを受けるところとなり、1979年に文化大革命が終息するまでその存在は否定されていました。1980年、文化大革命後初めてのクリスマス礼拝が上海で行なわれた時、会衆は破壊されていた聖歌集の中から、記憶でしかただけの聖歌を涙と共に歌ったと伝えられます。

この後プロテスタント系キリスト教諸派は合同し、中国基督教協会を設立しました。これは教会一致を視野にいれた、壮大な実験的合同教会の出発でした。中国基督教協会はまず聖書を、そして「讚美詩」という聖歌集を出版しました。1983年のことですから、極めて集中的・かつ緊急な作業だったと考えられます。

『讚美詩』は400編の聖歌と、付録として「短詩」42編によって構成され、400編のうち292編が従来用いられてきた欧米の聖歌、6編が新たな翻訳、102編が中国人作の聖歌です。さらにこれら102編中56編は、文化大革命後の新作です。聖歌集改訂委員会は、特にこれらの中国人の手になる新しい聖歌に着目して研究しています。(鈴木隆太)

発行：聖歌集改訂委員会

ご意見・ご質問は日本聖公会管区事務所まで
〒162-0805 東京都新宿区矢来町6-5
TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175